られた命も、表記の仕方によって存在じたいが危ぶまれることになりかねない。「薔薇」を冠したこの句は、あえて「カタカナ」「スカスカ」と重ねることで、その危うさを端的に示している。

「俳壇」九月号より

薔薇の名のカタカナ書きのスカスカす　山田真砂年

結社主宰一〇一人競詠「カタカナ書き」より。元来、僧侶の間で漢文を読み解く記号として作られた片仮名、字画を省いたその成り立ちからして「スカスカ」していて当然なのだが、日本語表記のひとつとして日常的に使われるようになると、妙に物足りなさが浮き立ち、違和感を覚えることがある。「薔薇」と「バラ」では受ける印象がまるで違うし、「カタカナ書き」された「名」はどれも表情が薄れ、存在としての重みが伴わない場合もある。「薔薇」のように艶麗たる花ならなおさらだ。言葉がものをあらしめると考えるならば、名付けることによって全体から切り取